

第 13 回国語分科会国語課題小委員会・議事録

平成 29 年 10 月 20 日（金）
15 時 00 分～16 時 55 分
旧文部省庁舎2階・文部科学省第2会議室

〔出席者〕

（委員）沖森主査，森山副主査，秋山，石黒，入部，川瀬，塩田，鈴木，関根，
滝浦，田中，福田，やすみ，山田，山元各委員（計 15 名）
（文部科学省・文化庁）西田国語課長，鈴木国語調査官，武田国語調査官，
小沢専門職ほか関係官

〔配布資料〕

- 1 第 12 回国語分科会国語課題小委員会・議事録（案）
- 2 伝え合いのための言語コミュニケーション（仮題）（審議経過報告素案）

〔机上配布資料〕

- 国語関係答申・建議集
- 国語関係告示・訓令集
- 国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）
- 国語に関する世論調査 分類別問い一覧（平成 28 年 12 月 6 日版）

〔経過概要〕

- 1 事務局から配布資料の確認が行われた。
- 2 前回の議事録（案）が確認された。
- 3 配布資料 2 「伝え合いのための言語コミュニケーション（仮題）（審議経過報告素案）」について説明があり，説明に対する質疑応答と意見交換が行われた。
- 4 10 月 27 日の国語分科会に報告する審議経過報告の修正は沖森主査に一任することが了承された。
- 5 国語分科会について，平成 29 年 10 月 27 日（金）午後 3 時から 5 時まで文部科学省 15 階・15F 特別会議室で開催すること，また，次回の国語課題小委員会について，平成 29 年 11 月 17 日（金）午後 3 時から 5 時まで文部科学省 5 階・5F 4 会議室で開催することが確認された。
- 6 質疑応答及び意見交換における各委員の発言等は次のとおりである。

○沖森主査

それでは，コミュニケーションの在り方・言葉遣いについての協議に移ります。本日は，来週 27 日の金曜日に予定されております国語分科会でお示しする審議経過報告の案について御検討いただきたいと考えております。

配布資料 2 「伝え合いのための言語コミュニケーション（仮題）（審議経過報告素案）」を御覧ください。これは，前回の国語課題小委員会で御検討いただいたものを，主査打合せ会で御意見に沿って整理し直し，更に新たな部分を付け加えたものです。

まず，事務局から配布資料 2 の概要について説明をお願いいたします。

○武田国語調査官

それでは、配布資料2全体について、簡単に御説明いたします。

まず、前回の国語課題小委員会までと変わっている点として、章立てが変更されております。Ⅰ、Ⅱ、Ⅲという構成は一緒で、前回は、Ⅲが丸々Q&Aということでした。今回、Ⅰは1～4だったものを1と2だけにいたしました。それから、「これからの伝え合いの在り方」として、前回のⅠ―3、4からⅢ―1をⅡといたしました。そして、Ⅲは、言葉の部分、言葉による伝え合いの部分に焦点を絞る形にいたしました。まず1で四つの要素について説明し、その後で具体的にQ&Aでその四つの要素について考えていただくと、そういった構成を今、考えております。

さて、今、申し上げた四つの要素ですが、前回の国語課題小委員会の中で「正確な言葉」、「分かりやすい表現」、「ふさわしい内容」、「心地良い距離」という御提案を頂きました。それ以前は「正確さ」（正確に）、「分かりやすさ」（分かりやすく）、「ふさわしさ」、「心地良い距離」でしたが、これについてももう一度、主査打合せ会で御検討いただきました。まず、国語課題小委員会で滝浦委員が御提案くださった形をベースに、主査打合せ会で検討していったんですが、結果として、今回の審議経過報告素案としては、「正確さ」、「分かりやすさ」、「ふさわしさ」、そして今まで「心地良い距離」という言い方をしていたものを、「敬意と親しさ」という言い方に置き換えています。

これは、「心地良い距離」と言うと、もちろん対人関係の距離ということですが、場合によっては空間的なものと捉えられたりすることがあるかもしれない、もっとはっきりと敬語の使い方であるとか、あるいは、どうやって親しさ、親しみを示すかという問題点が分かるようにしてはどうかということで、このように変えております。

それから、今回、初めて国語課題小委員会にお示しするものとして、配布資料2の41ページにウェブ調査の結果というものがあります。これは以前、文化庁国語課でインターネットを使った調査を考えているということで、国語課題小委員会で委員の皆様への問いの案を出していただきたいというお願いをいたしまして、委員の方からの御提案で作ったものがここに掲げられている三つの問いです。この結果を、今回、初めてお示ししています。これはQ&Aの中で引用されたりもしておりますので、Q&Aと併せて御覧いただければと思います。

それから、今後の課題と言いますが、現段階でどの辺りがまだ十分に詰められていないかということについてですが、一つは、Q&Aが現在26問になっておりますが、これはもう少し数が増えていくことになるということです。Q&Aに関しては、特に主査打合せ会の委員の方を中心に、非常にお忙しい中、書いていただいたもので、1ページになっているQが、複数のQに分けられるものが出てくるとか、あるいは、それぞれの委員がお書きになったものですから、例えば言い方であるとか、表現であるとか、そういったものをそろえていくなど、今後必要になるかとも思っております。

もう一つは、現段階ではまだ仮の題であるということです。「コミュニケーション」という言葉の扱いについて、いろいろ検討がなされておりますが、タイトルとの関係も含めて、その辺りをまた整理する必要があるということも話題になっております。

○沖森主査

事務局の説明について、直接関係することで御質問があればお願いします。

(→ 挙手なし。)

ないようでしたら、中身に入っていきます。今回も、冒頭から資料を読み進めながら御意見を頂きたいと考えております。

まずは、「はじめに」から「Ⅰ 伝え合いに関する基本的な考え方」までを読んでいただき、その後、協議に移りたいと思います。

○武田国語調査官

では、読み進めていきます。

「はじめに

第16期及び第17期の文化審議会国語分科会（以下「分科会」という。）は、その下に国語課題小委員会と日本語教育小委員会を設置し、それぞれの課題について審議してきた。このうち、国語課題小委員会においては、平成25年2月18日に分科会が取りまとめた「国語分科会で今後取り組むべき課題について（報告）」のうち、「3 言葉遣いについて」及び「4 コミュニケーションの在り方について」を取り上げ、平成28年5月13日以来、計13回の小委員会（このほかに計10回の国語課題小委員会主査打合せ会）を開催して、検討を進めてきた。

上記の分科会報告が示す3と4とは互いに関係が深く、「言葉遣い」の問題は、広い概念として捉えた「コミュニケーションの在り方」に含まれるとも考えられる。よって、二つを別の問題として分けて検討するのではなく、両者を共に審議の対象とすることとし、主としてコミュニケーションの在り方に関する観点に基づき、検討を進めてきた。その際には、平成7年度から文化庁が実施してきた「国語に関する世論調査」の結果データが活用されるとともに、「現代社会における敬意表現」（平成12年 国語審議会答申）、「これからの時代に求められる国語力について」（平成16年 文化審議会答申）、「敬語の指針」（平成19年 文化審議会答申）の考え方によりつつ、それを補うことが意識された。

ここに示す「伝え合うための言語コミュニケーション（仮題）」（審議経過報告）は、以上の経緯を踏まえ、これまで国語課題小委員会でなされてきた審議経過をまとめたものである。

私たちは、一人一人が異なる存在である。とりわけ現代は、価値観が多様化し、共通の基盤が見付けにくくなっている時代である。こうした「多様な私たち」を前提とした社会で生きていくためには、伝え合い、特に言葉による伝え合い（言語コミュニケーション）によって、情報や考え、気持ちを互いにやり取りし、共通理解を深めていくことが欠かせない。

言語環境が大きく変化する中で、何をどのように伝え合うことが望ましいのか、これは、複雑化した今日を生きる私たちの多くが抱える悩みである。

伝え合いには常に正解があるわけではない。しかし、より望ましい伝え合いに近づくための方法は、きっとあるはずである。文化審議会国語分科会は、伝え合い、特にそのうちの言葉による伝え合いにおいて意識すべき大切な観点として、「正確さ」、「分かりやすさ」、「ふさわしさ」、「敬意と親しさ」の四つを掲げる。これらの観点をヒントとして提示し、言葉によって望ましい伝え合いを実現するための工夫を共に考えていきたい。

I 伝え合いに関する基本的な考え方

1 コミュニケーションへの期待

（1）重要視されるコミュニケーション

◇社会は「コミュニケーション能力」を求めている

コミュニケーションをめぐる力が重要視されている。主に大学生などの若者に向けてなされてきた近年の提言では、身に付けるべき能力の一つにコミュニケーションに関する力を掲げるものが多い。企業が新卒者を採用するに当たり特に重視する点として、学業成績からだけでは測れない「コミュニケーション能力」が10年以上にわたっ

て第1位に挙げられているといった調査結果もある。コミュニケーションに関連する書籍も数多く出版されている。

◇教育でも対話が重視されている

学校教育でも、思考力・判断力・表現力などを重視し、対話を深めながら、主体的に学ぶことを目指している。学力は、一方的に教え込むのではなく、コミュニケーションを通して築かれているものとして捉えられるようになってきた。

(2) コミュニケーションをどう捉えるか

◇コミュニケーションは魔法のつえではない

しかし、コミュニケーションやコミュニケーションをめぐる力は、様々な問題を立ちどころに解決に導く魔法のつえというわけではない。

◇様々なイメージがある

そもそもコミュニケーションという用語については、人によって意味や用法、抱いているイメージが異なる。「コミュニケーション能力」は、言葉の使い方に関する能力として捉えられることも、問題解決能力や企画力、発想力など、言葉以外の面にもまたがる総合的な力を指して用いられることもある。考えをはっきりと言語化して伝達する力とみなす人もいれば、言葉にせずとも相手の意図を察しそれに合わせ行動することであると考える人もいる。

◇一人では成り立たない

また、個々人が何らかの力を身に付けていれば円滑なコミュニケーションが達成されるわけではない。コミュニケーションは複数の人間が参加して、初めて成立するものであり、うまくいったかどうかを、安易に誰か個人の持っている能力に帰することはできない。様々な課題を考えるに当たっては、コミュニケーションに関わる人それぞれが、皆、責任を負っているのである。

◇媒体や手段が多様化している

さらに、現代のコミュニケーションのために用いられる媒体が多様化しており、年代や生活様式、個人の好みなどによって、選ばれる手段も異なる。どのような媒体、手段を採るかで、コミュニケーションに寄せる期待も変わってくるであろう。

◇コミュニケーションのうちの「伝え合い」に注目する

望ましいコミュニケーションのイメージを、社会全体でどこまで分かち合うことができるだろうか。それを考える上では、コミュニケーションと呼ばれてきた事柄のうち、どのような側面について取り上げるのかを、できるだけはっきりとさせなくてはならない。以下、この報告では、様々な意味合いやイメージで捉えられることのあるコミュニケーションのうち、情報や考え、気持ちをやり取りし、互いについて共通理解を深めていくという働きに注目し、これを「伝え合い」という言葉で表していく。

2 伝え合いとは

伝え合いとは、複数の人が互いの異なりを踏まえた上で、情報や互いの考え、気持ちなどをやり取りし、理解し合い、その理解を深めることである。伝え合いは、①言葉によるもの、②言葉の周辺にあるもの（声量や声の質、話す速度など）、③いわゆる言葉以外のもの（表情、姿勢、視線など）を組み合わせで行われる。

(1) 伝え合いとは受け止め合いでもある

◇送り手、受け手は常に入れ替わる

伝え合いは、送り手（話し手、書き手）と受け手（聞き手、読み手）の間で行われるが、その役割は固定されたものではない。常に役割を切り替えながら、共通の理解を目指していく。伝え合いは、言い換えれば、受け止め合いであるとも言える。

◇話し言葉による伝え合い

話し言葉による伝え合いでは、話し手は、話しながら相手の相づちの仕方や声、対面であれば表情などの変化を観察し、うまく伝わっているかどうかを読み取ろうとする。聞き手は、聞きながら自分がどのくらい話が理解できたかについて、相手が気付くように反応を返し、よく分からないときには、質問することで送り手の側に立つ。そして、質問を受けた側は、言い換えや説明をする機会を得ることになる。このように、送受の役割を入れ替えつつ、話しながらも反応を受け止め、聞きながらも理解の度合いなどを伝えている。

◇書き言葉、打ち言葉による伝え合い

書き言葉による伝え合いでも、書き手は、読み手の反応を想定しつつ書き、読み手は、書き手の側に寄り添い、自らの情報を補いながら読むことによって理解を共有する。

SNSなどのテキストのやりとりは、文字に表すという点では書き言葉に入り、即時的にやり取りされるといふ点では話し言葉に近い。キーを打って伝える、こうしたいわば「打ち言葉」は、かつてはなかった新しい伝え合いの形だが、互いに理解を深めていくための受け止め合いであることは変わらない。

◇伝え合いは続く

伝え合いは、やり取りが済めばそれで終わりというわけではない。うまく理解し合えれば新たな伝え合いへとつながるが、理解し合えなかった場合には誤解を残したままになり、それ以降の伝え合いに支障を及ぼすこともある。

(2) 異なりを踏まえて歩み寄る

◇自分と相手が異なった存在であることを理解する

人は、それぞれが全く別の存在である。自分と相手との異なりを十分に意識し、互いにその違いを乗り越えて歩み寄らなければ、円滑な伝え合いは実現しない。

◇歩み寄りを共通理解への地ならしとして捉える

歩み寄りとは、相手の聞く力や理解する力、知識の量、語彙力、情報を処理する速さなどを推し測り、相手が何を共有したいのかを想像し、それらに沿うよう、相手に合わせた言い換えを行ったり、話す速度を調整したりすることによって行われる。

歩み寄りといっても、相手におもんばかって意見を合わせ、自分押し殺すのではない。お互いに了解し合うための地ならし、土台作りである。歩み寄りは、相手が伝えようとするのをうまく受け止めるために必要であるとともに、自らが伝えたい情報、考え、気持ちをきちんと伝えるための準備である。

◇受け手も大きな役割を果たしている

伝え合いにおいては、そこに参加する人それぞれが、既に持っている知識や経験を基に相手からの情報を理解しようとする。送り手は自分の言葉が意図したとおりに受け止められるとは限られないことを、いつも意識しておかなければならない。また、受け手も送り手の意図を理解するように努め、分からないときには随時、そのことを送り手に知らせるなどの配慮が必要となる。伝え合いがうまくいくかどうかは、送り手の在り方に注目が集まりがちだが、受け手の役割と責任も同じように大きい。

◇客観的な視点から状況を把握し調整する

送り手、受け手というそれぞれの役割をこなすことだけでなく、伝え合いが行われている状況そのものを第三者的立場から観察し、現在、どのような段階にあるのか、互いの理解は進んでいるかなど、伝え合いの現状や行方を展望する視点に立つことも重要である。

相手に対してどのように接しているか、適切な言葉や態度、表情で応じているかなどを客観的に判断するとともに状況を把握し、目的に合わせて方向性を調整していくことが求められる。

(3) より良い伝え合いを求めて

◇難しいと感じるのは自然なことである

伝え合いには、こうすれば必ずうまく行くというような決まった近道はない。事前にどれだけ準備したとしても、相手の出方、状況の変化、想定外の展開により、その都度の対応が求められる。自分の意図どおりに伝わらなかったり、相手の言いたかったことを誤解して受け取ったりということは、日頃から誰もが経験していることであろう。伝え合いは異なる存在の間で行われるのだから、うまくいかないことがあっても不思議ではない。難しく感じるのも無理のないことである。

◇近道がないことを分かった上で

だからといって、より良い伝え合いへの努力を放棄するわけにはいかない。社会生活を送る上で、互いの理解を深めるため、情報や考え、気持ちをやり取りすることは欠かせないのであり、より望ましい伝え合いのための方法を探り続ける必要がある。

これからの時代における望ましい伝え合いとはどうあるべきで、どのようにしたらその実現に近づけるのか。次章では、伝え合いに関する現代の課題を見た上で、これからの社会における伝え合いに必要な考え方を提案する。」

○沖森主査

ただ今読み上げていただきました部分について、質問も含め、自由に御意見を頂きたいと思います。具体的な修正案や、更にこの点を検討すべきだということなどがありましたら、是非ともお聞かせいただきたいと思います。

○川瀬委員

力作だと思います。最初から話してきたことが、すっきりまとまっていて、いろいろな言葉の工夫がなされていて、ここに至るまでかなりの御労苦があったものと思います。昨日、この一つ前の原稿を頂戴したときから、すごくいい序文だなと思って感激しています。私からは、特にここがこうということはございません。

○沖森主査

ほかに御意見ございませんでしょうか。感想でも結構です。(→挙手なし。)

後でまとめて御意見いただくということでも結構ですので、続きまして「Ⅱ これからの社会における伝え合い」の「1 伝え合いについての現代の課題」を読んでいただき、その後で意見交換をしていただきたいと思います。読み上げをよろしく願います。

○武田国語調査官

では、お読みいたします。

「Ⅱ これからの社会における伝え合い

1 伝え合いについての現代の課題

(1) 変化する社会の中で

◇異なりが拡大している

都市化、国際化、情報化などの進展とともに、かつての共同体での結び付きが緩やかになり、顔見知りではない人、考え方や生活習慣の違う人たちと接する機会が多くなっている。ウェブ上では、国境に関係なく、見ず知らずの他人と交流することも可能である。他者と自分との間の異なりは、以前よりも大きくなっている。

◇同質性から多様性へ

元々、日本には伝統的に、言葉で言い尽くさずに互いに察し合う文化があると言われてきた。しかし、その前提となっていた感性、思考方法、行動様式などにわたる種々の同質性は、少しずつ失われつつある。同質性を前提にするのではなく、異なりや多様性に注意しながら伝え合う必要が生じている。

(2) 理解し合うことが難しい人たちと

◇専門家と非専門家がどう理解し合うか

様々な分野で高度な専門性が求められるようになってきている現代においては、以前なら伝え合う機会が必ずしも多くなかった専門家とそれ以外の一般人（非専門家）との間で、直接にやり取りする必要があるようになった。専門家は非専門家に対して、知識や情報を正確に分かりやすく伝えていくことが求められている。一方、非専門家であっても、自分の命や生活に関わる分野に関しては専門家任せにせず、積極的に学習し、認識を深めていくことが必要となっている。両者の間で、どのように知識の差を埋めながら伝え合っていくかは、これからの課題の一つである。

◇主義主張の異なる者同士でどう歩み寄るか

他者との異なりがよりはっきりと表れる場合として、政治的な立場、宗教や信条の違いなどがある。お互いの主義主張や考えが真っ向からぶつかるような場合にも、どうしたら互いを尊重して歩み寄り、共通理解を図っていくことができるのか、あるいは、十分な共通理解が築けないような場合にも、どのように互いの言葉を受け入れ合ふべきなのか、多くの人があるためのヒントを求めている。

◇他人を受け入れようとしない人にどう対処するか

また、一方的に自分の考えを主張し、他者の意見を受け入れようとしない、強圧的な態度を取る人もいる。歩み寄ることをせず、伝え合いの可能性を頭から否定するような在り方に対して、どのように向き合うことができるのか、適切な対処が必要とされている。

(3) 伝え合うことへの萎縮

◇のびのびと伝え合うことができない

「コミュニケーション能力」への期待が高まる中で、きちんとした言葉遣いができないと、社会から認めてもらえないと感じている人も多い。そして、そのための力を身に付け、しっかりと自己表現することを望みながらも、誤りや言葉遣いが十分でないことを指摘されることを恐れて、萎縮し、伝え合いに自信をなくしてしまう人が少なくない。できるだけ丁寧な言葉遣いを心掛けた結果、行き過ぎた敬語の使用に陥り、その点をまた問題にされるなどといった悪循環も生じている。

◇言葉に対する寛容さが失われている

行動は変化するものであり、地域によって通用する言い方が異なる場合もある。同じ意味を伝える表現が複数あることも多く、正解は一つとは限らない。また、特に話し言葉においては、言い間違いは付きものである。しかし、自身が正しいと感じている言葉遣いや、伝統的・標準的とされるものだけが基準とされ、それ以外のものを誤りであると見なされたり、相手の気持ちを察しようとせず、発せられた言葉の誤りばかりが注目されたりする場合がある。

(4) 世代間の意識の違い

◇若者は相手に合わせる傾向がある

若い年代ほど、「コミュニケーション能力は重要である」という意識を持つ人の割合が高く、また、伝え合いがうまくいかなかった場合にその原因を自分の責任として捉

え、相手や場面に合わせようとする傾向がある。

反対に、年代が高くなるほど、相手や場合に関係なくいつも同じような態度で振る舞うという人が多い。相手に合わせようという意識は、若い世代に比べて弱い傾向がある。

◇若者だけの課題ではない

「コミュニケーション能力」は、大学生や社会人になろうとする人々に求められる力として話題になることが多い。一方、知識や経験、理解力が十分ある人々に対して、伝え合いの在り方が問題にされることは少なかった。伝え合いに参加する人たちそれぞれが互いに対して責任を負っているということが、十分に認識されていないおそれがある。

◇語彙の質を高めることが難しい

伝え合いにおいて、相手に配慮した表現を選択し、必要な言い換えを行うことができるようにするためには、語彙力が必要である。特に若い年代では、語彙の量とともに質を高めることが必要である。語彙は体系的に習得されることが望ましいが、現代においては、たくさんの情報を受け取る機会があるものの、繰り返し読み直し、深く理解するというものにつながっているわけではない。漢字や言葉の意味は、手元の情報機器によって簡単に調べられるが、それらを分類、整理し、身に付けることが課題となっている。

(5) 情報化の進展による伝え合いの変化

◇伝え合いが24時間態勢になっている

情報化が進み、いつでもウェブに接続可能なモバイル機器が普及したことによって、私たちは昼夜いつでも情報の発信あるいは受信が可能な状態となり、伝え合いの機会が増大している。また、SNSなどの普及により、発信あるいは相互のやり取りが多くの人々の目に触れ、同時に評価にさらされる機会も増えた。こうなると、伝え合いに対して、不安や困難を覚える人が増えていても不思議はない。

◇濃密化と広範囲化が共存している

ウェブ上には、SNSなどの広がりによって、ごく親しい人との個人的で極めて頻繁なやり取りと、顔も名前も知らないような不特定の人々を対象とした広範囲で匿名性の高いやり取りという、対照的な伝え合いが共存している。やり取りをしている場や用いる手段の特性を十分に理解あるいは意識していないことによって、個人情報幅広くさらされたり、知らぬうちに反社会的行為に荷担してしまったりする場合がある。また、実際には、限られた人たちだけが関与しているにもかかわらず、特定の対象を短期間に集中的に攻撃する「炎上」と呼ばれるような事象に関与してしまうことにもつながる。

◇知らない言葉に触れる機会が増えている

スマートフォンの普及に並行して、流行語や新しい言葉、外来語・外国語、また、年の離れた人たちが使っている言葉の意味が分からずに困ることがあるという人が増加している。パソコンなどに比して、ウェブ上に存在する、世代や社会的属性を超えた情報を得やすくなったことによって、これまで知らなかった言葉に出合うことが増えているためとも推測できる。

(6) 対面での伝え合いに対する意識

◇ウェブを通じた連絡が多くなっている

近年のインターネットを利用したメール、SNSなどの普及により、かつては対面や電話で行っていたことのうちの多くを、非対面での文字のやり取りによる伝え合いで行えるようになった。そのことによって、対面や電話での伝え合いに対する意識に

変化が生じている。

◇対面での伝え合いがおっくうに

例えば、対面や電話のようなリアルタイムでのやり取りを行う伝え合いであれば、すぐに何かしら返事をする必要があったのに対し、その必要のない非同期的な媒体では、都合が悪い場合に回答を避けたり、遅らせたりするという選択ができる。そのような同期性の低い、また、顔を合わせる必要のない手段に慣れてしまうと、時間や場を共有する必要のある対面や電話による直接的な伝え合いをおっくうに感ずるようになる可能性がある。

◇「打ち言葉」による伝え合いは誤解されやすい

一方で、非同期・非対面の媒体である電子メールやSNS、ブログなどによるやり取りには、誤解やトラブルが付きものであるという認識は一般に高く、自分の本音を親しい人に伝える場合には、対面での会話が望ましいと考える人が圧倒的に多い。伝え合いのための媒体が多岐にわたり、目まぐるしく変化していく中で、それぞれの特性を見極め、目的に合った手段を選択し、適切に運用する力が期待されるゆえんである。

○沖森主査

ただ今読み上げていただきました部分で、質問も含め、自由に御意見を頂きたいと思います。

○田中委員

7ページ、「(4)世代間の意識の違い」の三つ目「◇語彙の質を高めることが難しい」のところの「語彙の質」について、何となく分かりませんが、「語彙の質」とは何かちょっと分かりにくいかと思いました。

それと、ささいなことですが、この段落の4行目の真ん中辺り「繰り返し読み直し」というのはちょっとくどいかと。「繰り返し読み」でどうでしょうか。

それから、最後のところ「漢字や言葉の意味は、手元の情報機器によって簡単に調べられるが」と言っていますが、そもそも調べるところから始めようみたいな話になっていたような気がしました。だから、調べているのかというと、多分、調べていないので、調べるということも入れていいのかもしれないかと思いました。

「(5)情報化の進展による伝え合いの変化」のところ、「媒体」と呼ぶか何と呼ぶかということはそろえようといった議論があったと思います。何となく同じことを、「媒体」と「手段」と二つ使っているような気がします。これは、「媒体」が続かないようにという配慮なのかもしれませんが、どうか。「媒体」と「手段」は、意味を持って違うのか、何となく言い換えなのか。もし同じだったらば、統一してしまった方がいいのかもしれないかと思いました。

それと似たようなことですが、「◇伝え合いが24時間態勢になっている」1行目、ここでは「ウェブに接続可能なモバイル機器」と言っています。8ページ「◇知らない言葉に触れる機会が増えている」のところでは、もちろんこのところ急速に進展してきた情報機器はスマートフォンなので、「スマートフォンの普及に並行して」でもよいとは思いますが、「タブレット」などを入れないで、ただ「スマートフォン」でいいのか。最近の個別事例を挙げておくと、すぐ古びるからといった議論もありました。何にせよこの辺のところは古びそうですが、どうなのかと。もっと何かすごいものが出てくるかもしれませんが、ここは「スマートフォンに代表されるようなウェブに接続可能なモバイル機器」などとしていいのかもしれないかと思いました。

(6)の二つ目「◇対面での伝え合いがおっくうに」の2行目。「何かしら返事をする必要があったのに対し」は「何かしら反応をする」でどうでしょうか。返事と言えば返事だけれども、「ああ」とか、曖昧に濁したりとか、ぐずぐずしているものとか、何

せよ黙っていても反応は分かります。電話でも何か言いよどんでいるのは分かるので、反応の方がよいかもしれない。

あと、「おっくう」も何かふさわしい言葉があるとよいと思いました。

最後、「◇「打ち言葉」による伝え合いは誤解されやすい」3行目、「対面での会話が望ましいと考える人」は圧倒的に多かったんでしたっけ。多かったのは多かったですが、圧倒的だったかどうか。確認していただければと思います。

○鈴木委員

今、田中委員から出た中の一つで、7ページ(4)3番目の◇、最後から2行目のところ「漢字や言葉の意味は、手元の情報機器によって」というところを、「漢字や言葉の意味は、」の後に「辞書や手元の情報機器」のようにしていただきたい。ちょっと細かいことかもしれないですが、多分、「辞書」を入れたとしても、この段落の意味を変えることにはならないと思うので、是非よろしくお願いします。

○川瀬委員

6ページ、(2)の下、「◇専門家と非専門化…」は資料では「化」となっています。「家」ではないでしょうか。

それと、「◇主義主張の異なる者同士でどう歩み寄るか」ですが、政治的な立場、宗教や信条まで話を大きくしてしまっているのかなと思いました。政治や宗教のような大きなテーマだけではなく、仕事や生活習慣などの考え方とか、意見の違いで摩擦が起きていることが今に至っていると思います。政治、宗教、信条だけを主に出すのは、せつかく細かくやってきたのにもったいないという感じがしました。

次、8ページ、情報機器の濃密化と広範化、情報機器の使用による濃密化と広範化の部分で、個人情報さらされるとか、反社会行為に荷担するとか、炎上に関与するなど、いわゆるネットリテラシーの方に話が向かっています。伝えたいことがネットリテラシーだというのは分かりますが、個人的に小規模に話したことが思いのほか広がってしまったというニュアンスが欲しいと思います。個人情報の電話番号が表に流出してしまうといった話ではないということ伝えたい印象がありました。

しかも、反社会的行為に知らぬうちに荷担するとはどういうことなのか。ヘイトスピーチに乗っかってしまうとか、そういう話なのか。炎上に関与してしまうのも、これはこれでコミュニケーションというか、意思表示の一つなのかもしれないので、この辺のニュアンスが若干分かりにくいという感覚がありました。

○関根委員

先ほど鈴木委員がおっしゃった、「辞書」を入れておくというのはそのとおりだと思います。ただ、情報機器の中に入っている辞書があります。恐らく紙の辞書と情報機器に入っている辞書との違いとか、ここでは、紙の辞書だったら丹念に読み込むことで語彙の質を高めることにつながるけれども、情報機器に入っている辞書だと簡単に意味だけをぱっと見てということなど、もしかしたら媒体による違いもあるかもしれない。だから、この部分を、先ほど田中委員もおっしゃった「語彙の質」とは何かということも含め、もうちょっと詳しく書いてもいいのではないかと思います。

そして、「(4)世代間の意識の違い」のところに入っていて、確かにそういう部分もあるかもしれませんが、流れとしては、(5)の「◇知らない言葉に触れる機会が増えている」のところの「知らなかった言葉に出会うが増えている」にもつながる話かと思うので、そちらの方に持って行って、語彙についてもうちちょっと丁寧に、あるいは調べるとか、語彙の質について一緒に書いたらどうかと思いました。

○塩田委員

8 ページ「◇対面での伝え合いがおっくうに」のところの最後「直接的な伝え合いをおっくうに感ずるようになる可能性がある」となっていますが、「それで何…」と思いました。つまり、昔、電話が社会に入ってきたときにも、これによって人と人との接触が希薄になるとか、言われたわけです。だけど、今の私たちは、もう電話がない世界には戻れません。恐らく今後も、こういう非同期的なコミュニケーションが減るということは、多分、ないと思うんです。それが社会の常識になっていくわけです。

では、この状況で、私たちのそういうコミュニケーション規範を変えていくべきなのか、あるいは、そうなんだけれども、非同期的なコミュニケーションをなるべく減らしていこうという提言をしようとしているのか、読み取れないんです。多分、おっくうになるでしょうけれども、それでどうしたらいいのかということが思い付かないんです。この現状を認めていけばいいのか、どうしたらいいのかというのが思い付かない。

○田中委員

慣れるのを持つということになるか…。

○森山副主査

8 ページ(6)の2つ目の◇、「対面や電話のようなリアルタイムでやり取り」という部分の「リアルタイム」という言葉と、その下の「◇「打ち言葉」による伝え合いは誤解されやすい」のところの「非同期」という言葉と、3 ページ一番下の行の「即時的に」という言葉と、似たような言葉が輻輳^{ふくそう}しているような印象がありますので、整理した方がよいと思いました。

それから、3 ページ(1)の「◇送り手、受け手は常に入れ替わる」について、今までのところは、個人と個人のコミュニケーション、伝え合いということが、それとなく前提とされているようなところがありますが、伝え合いというか、コミュニケーションという場合には、例えば学校便りとか、市民便りみたいに1対他で、必ず常に厳密な形で送り手と受け手が交代するわけではないと思うんです。ですから、一つの案としては、「主に個人と個人の伝え合いでは」といったことをこの段階で入れておくと、そういう1対他に対する一応の配慮もできるかと思いました。

○山元委員

6 ページ(2)の「◇専門家と非専門家がどう理解し合うか」のところですが、今までの論議に関わっている私たちは、2行目の「専門家とそれ以外の一般の人との間で」と読んだら、「ああ、お医者さんと患者のことね」と読み返せるんですが、初めて読むときには何か具体的な例、医師と患者というようなことをどこかに入れた方がイメージしやすいのではないかと思います。4行目「自分の命や生活に関わる」というところでそれらしきニュアンスは感じるんですが、具体例、医師と患者のようなどいうことを入れた方がイメージの枠ができるので、理解が進むかと思いました。

2点目です。7 ページ(4)の「◇若者だけの課題ではない」の2行目「一方、知識や経験、理解力が十分ある人々に対して、伝え合いの在り方が問題にされることは少なかった」。ここをさっと読んだときに、「知識や経験、理解力が十分ある人々の」と読み替えてしまっているんですね。つまり、「対して」というのが、ベテランの人々に対して行う伝え合いと読んでしまったんです。「の」に直した方がいいのか分からないんですが、経験ある人の伝え合いという方も問題があるのではないかとといったニュアンスが、より出る形の方がよいと思った次第です。

三つ目は、先ほどから問題になっている、すぐ下の「語彙の質」のところですね。世代

間の意識で若者と熟達者が並んでいて、三つ目にどうして語彙の質があるのかと私も少し思いました。先ほど、8ページ、「◇知らない言葉に触れる機会が増えている」の方にしたらどうかという代案が出ましたが、ここは何を訴えたいのか。最後が「分類、整理し、身に付ける」と急に勉強のような形になっているので、言葉を体系的に頭の中に組み込んでいって、自分のものにして使いこなすことが難しいという意味なんですか。そうすると、それは世代間の意識の違いとどう関わるのかということも疑問であり、分類、整理という学習のようなものではなくて、「言葉が個人の頭の語彙体系に組み込まれ、自分のものとして使いこなせていないことが課題となっている」というようにした方が分かりやすいかと思いました。

○石黒委員

まず6ページ、一番下の行です。「誤りや言葉遣いが十分でないことを指摘されること」というのは、ややこしいので、前の方は「誤りや言葉遣いの不十分さ」ぐらいでよいかと思いました。

7ページ(4)一つ目の◇「反対に、…」という新しい段落ができていますが、見出しの下の文章で段落が変わっているのはここだけです。段落は変えなくてよいと思います。

その二つ下の◇、最後の文の文末に句点(。)が二つあります。

8ページの上から3行目と4行目、2行目から読みますと「また、実際には、限られた人たちだけが関与しているにもかかわらず……呼ばれるような事象に関与してしまうことにもつながる」と、「関与している」、「関与してしまう」でつながるんですが、「関与」がつながっていて意味が分からなかったの、御検討ください。

その下、「◇知らない言葉に触れる機会が増えている」ですが、「流行語や新しい言葉」とありますが、歯切れの良さからすると「流行語や新語」の方がよいかと思いました。ただ、何か特別な意味が込められているのであれば、御検討ください。

また、「外来語・外国語」とありますが、気持ちは分かりますが、そうすると、もう一つ「片仮名語」というやっかいな、外来語でもないけれども使われるものがある。そうすると、あえて「外来語・外国語」と表記すると、「片仮名語」はどうなるのかということが気になります。

(6)3番目の◇、冒頭の文「一方で、非同期・非対面の媒体である電子メールやSNS、ブログ」と書いてありますが、その二つ上、「◇ウェブを通じた連絡が多くなっている」では「メール、SNS」とあります。こちらの方は、その後に「ブログなどによるやり取りには」と書いてあって、ブログはやり取りがないわけではないんですが、わざわざ「など」が付いているのでブログは要らないと思いました。

○山田委員

一つだけ。1章、2章を通じて「SNS」という言葉が何度も出てきますが、この報告はいろいろな世代の人が読みますので、そういう意味では、1章の3ページ「◇書き言葉、打ち言葉による伝え合い」のところで初めて「SNS」と出てくるんですが、そこで「SNS」の簡単な説明はしておかないでいいでしょうか。分からない言葉にぶち当たってしまうと、なかなか次を読む気にならなくなってしまうことが考えられるのではないかと思います。

○やすみ委員

私は、7ページの「◇語彙の質を高めることが難しい」というところの全般的なこと、語彙の量と質の「質」というのが少しイメージしにくいというお話が出てきました。私が携わっている川柳とか、あと俳句とか、短歌の世界でも、どんどんと幅を広げ

ていろいろな作品を作っていこうというときに、やはり語彙の量を増やすことに皆さんすごく努力して、日々、習得していくことを一つの目標にしています。ですから、この語彙の量という言葉に私はすごく興味を持ってしまおうんですが、その後に、質というよりは、今度はそれを使いこなしていける自分になることがいいのではないかと思います。例えば語彙の量を増やすとともに、それを使いこなせるようになっていくことが望ましいというような雰囲気の方が、幅広い人に分かるのではないかと思います。これは若い世代の人に対してだけではなくて、言葉に興味を持ったり、コミュニケーションに興味を持ったりしている幅広い年代の人に対してということになると思いますが、そんな感じがいいのかもしれないと拝見していて思いました。

○田中委員

6 ページの(3)「◇のびのびと伝え合うことができない」のところ、誤りとか、言葉遣いとか、敬語ができない、うまくスムーズにコミュニケーションができないというのが、(4)の「◇若者は相手に合わせる傾向がある」につながってくると思います。ただ、これは単に間違いが指摘されるからびくびくしているだけではなく、浮くことへの恐怖という保身が関わっていると思います。

(4)「◇若者は相手に合わせる傾向がある」にあるように「自分の責任として捉え」だけれども、確かに自分の責任と言えば責任だけれども、単にみんなからバッシングされたくない気持ちで一杯みたいなところは、どうやってうまく言ったらいいのだろうか、自分自身もどう盛り込んでいいのか分かりませんが、絶対に知識がないとか、敬語がうまく使えないとか、そういうことが第一の理由ではないと思います。何かうまく入れられないでしょうか。

○入部委員

先ほど山田委員が、「SNS」が、分からない人がいるのではないかとということで、最初にソーシャルネットワークという言葉や注を入れてはというお話がありました。やはりやっていないと、例えば「非同期性」、「同期」ということも多分、ぴんとこないと思います。こういう言い方はどうですかと申し上げることができればいいんですが…。できるだけ、注釈のような形にするか、あるいは何か言い換えで当てはまるものがあればそれでもいいかと思えます。「非対面」はぴんとくると思うんですが、「非同期」と言うと、やはりもう少し説明がないと分からないという感じがします。

○山元委員

7 ページ「◇語彙の質を高めることが難しい」というところが気になったという御意見、私もそう思います。昨日、頂いたバージョンだと「語彙力の不足が伝え合いを妨げている」になっていて、それなら分かるんです。それを、もっと世代間の意識の違いに引き寄せるとすると、語彙力の不足と偏り、世代によって持っている語彙の体系、枠組みが違って、それで意識が違うのでリスクになる、という文脈なら非常に分かりやすいと思います。ですから、「質」というのはやはりちょっと分かりにくいので、「語彙力の不足と世代間による偏り」のようにしたらどうかと思いました。

○川瀬委員

先ほどの SNS 論なんですが、限定してしまうとかえって、それはそれでまた難しいと思います。ネットワークを作っていなければ SNS ではないので、だからウェブ上にいろいろな伝達手段ができたことを総称して、今、SNS と書いているんだと思います。その辺のニュアンスをどうくみ取ってもらうかだと思います。LINE とかだけではなく、単純に自分がブログに書いたことに対して、それが引き出されて人に

誤解を与えたりというようなニュアンスも、多分、含んでいるお話だと思います。そういうところからメール、SNS、ブログと三つお並べになっているんだと思うんです。だから、7ページであったり、最初に出てくる部分であったり、SNSをソーシャルネットワークシステムと定義してしまうと、それはそれでまた限定的な意味になってしまうという気もいたします。

○石黒委員

7ページの「◇伝え合いが24時間態勢になっている」というのは、そう言われればそうだなと思ったんですが、先ほどの非同期というものと関連して考えると、24時間態勢になっている、でも非同期である。何かそこら辺に矛盾を感じて、だから、ここで問題としているのは「また」以降の話、つまりいろいろな評価にさらされるというストレスの部分なので、「24時間」というのはすごく印象的なフレーズなんですけれども、むしろ後半の方をタイトルにした方がいいかと感じました。

○沖森主査

それでは、続きまして、Ⅱの「2 伝え合いについての課題と向き合うために」から読み上げていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○武田国語調査官

では、読み上げます。

「2 伝え合いについての課題と向かい合うために

ここまで見てきた伝え合いに関する現代の課題に対して、これからの私たちは、どのような態度で向き合っていくべきであろうか。ここでは、これからの社会に必要な考え方を提案する。

(1) 言葉による伝え合いの重要性を見直す

◇伝え合いの中心は言葉による

伝え合いの中核にあるのは、言語であるということを改めて認識することが必要である。伝え合いにおいて、言葉以外の部分が担う働きは大きい。しかし、細かなところまで話を進めていくときや、生じてしまった誤解を修正し補うような場合には、言葉を用いた伝え合いが不可欠である。

◇考えや気持ちをはっきり言葉にする

また、異なりや多様性を前提としたこれからの時代においては、簡単には伝わらないといった認識に立った上で、自分の考えをはっきりと言葉にすること、質問や説明のやり取りによって互いの理解を深めていくことが欠かせない。考えや気持ちを言葉に表して伝え合うことを諦めてしまったら、優位な立場にある人や主張が強い人の意思ばかりが通っていくことになりかねない。

◇言葉による誤解を避ける

誤解が生じやすい言葉の使い方や場面がある。言葉の意味するところは文脈や状況によって変わることで、また、伝え合いでは常にちょっとしたことで誤解が起きるおそれがあることを十分に意識する必要がある。その上で、どのような場合に誤解が生じやすいのかをあらかじめ知っておくことによって、言葉による誤解やトラブルの多くを予防できる。

◇言葉の重みを再認識する

いつも手にしている情報端末やメディアには、自ら選び取るまでもなく言葉がやって来て、次から次へと目まぐるしく入れ替わり、曖昧なまま理解したようなつもり

なることが少なくない。それらの一つ一つについて、意味を深く考えたり、味わったりすることは難しい。しかし、重要な通知を受け取ったときや、大切な人から相談を受けたときなど、必要な場合には、言葉をしっかりと受け止め、その内容について、よく考えることが大切である。

(2) 他者との歩み取りを大切にす

◇他者との異なりを認め歩み寄る

伝え合いの下地となる、他者との異なりを認め歩み寄ろうとする態度を、社会全体で大切にしていくことが必要である。他の人の考え方や気持ち、受け止め方は、自分と異なっているのが当然であることを踏まえ、それぞれが歩み寄ることなくしては、自分の考えや気持ちを言葉に表して伝え合う社会は実現しない。

◇相手や周囲に合わせるのではなく、伝え合う方法を探る

異なりがあるのは当然なのであるから、事を荒立てることを恐れて相手の意見に合わせてしまうのではなく、関係を壊さずに伝え合う方法を模索すべきである。また、相手が言いたいことを伏せて、自分に合わせていると感じられるような場合には、受け止める態度を示しながら、どのように考え感じているのかを尋ねるなど、言葉を引き出すよう努めることが望ましい。

◇理解し得ない場合にも異なりを尊重する

もし、異なりが大きく歩み寄ろうとしても土台を築くことができず、共通理解を図ることが難しい場合にも、互いが異なる考えや意見を持っているということを理解し、尊重し合う必要がある。

◇外部の人には、仲間内に向けてとは違った言葉で

なお、職場や業種、学校、趣味が一緒の人などのように、常に同じ情報を共有している同質性の高い人同士、言わば仲間内の関係では、有効な察し合いが行われたり、そこでのみ通用する言葉のやり取りによって成立したりする伝え合いがある。専門家同士が専門用語を使って伝え合うような場合や、いわゆる若者言葉や新語、ウェブ上に特有の言葉、地域の言葉などによるやり取りも同様である。異なりの大きい外部の人たちとの間での伝え合いを行うには、仲間内でのやり取りとは、違った言葉の使い方をする必要がある。

(3) 人の言葉には優しく、自分の言葉には厳しく

◇他者の言葉や言葉の使い方に対しては寛容に

自分の考えや意見を言葉に表して伝え合うためには、他者の言葉を受け入れようとする姿勢と、言葉遣い等に対する寛容さが必要である。また、そのような雰囲気社会全体に広げていくことが望ましい。それぞれの価値観の投げ付け合いや、一方の考え方を全面的に受け入れるだけといった言葉のやり取りに終わらないよう、互いが言いたいことを、しっかり話せるような状況を作ることも大切である。

◇自分の言葉や言葉の使い方を鍛える

他者への寛容さ以上に、ふだんから各自が自分自身の言葉や言葉の使い方については十分に気を使い、伝え合いのための力を身に付けるよう努力することが必要である。それによって、相手への歩み寄りがより適切にできるようになる。誤りについて指摘された場合については、それを前向きに受け止め、今後に生かすよう心掛けたい。

(4) 敬意と親しさをバランス良く示す

◇敬語を身に付ける

敬語についての意識が高まっており、多くの人がかちんと身に付けたいと考えている。敬語は仕事など実際の社会生活の中で主に身に付けられているが、「敬語の指針」

を活用するなど、具体的に学ぶ機会を捉えたい。また、他者の敬語の誤りなどに対しては、敬語を用いて敬意を示そうとする気持ちを尊重し、寛容に受け止めることも大切である。それとともに、誤りを指摘したりされたりすることに過度に敏感になるのではなく、歩み寄りの考え方にに基づき、身近な人と教え、教えられる関係を築きたい。

◇敬語は大切だが全てではない

敬語を身に付けることは大切であるが、それだけで望ましい伝え合いが実現するわけではない。敬語は、相手との距離を保ったり遠ざけたりするための言葉でもあり、使い方によっては、相手との関係にマイナスに働く場合もある。また、敬語を使わなくてはいけないという意識によって二重敬語などの過剰な表現が生じている面もある。敬語を絶対的なものと考えのではなく、相手との心地良い距離を作る上での自己表現として捉え、親しさを伝えることについても意識したい。

(5) 語彙の量と質を高める

◇語彙を身に付けることが伝え合いを円滑にする

望ましい伝え合いのためには、必要な語彙を身に付ける必要がある。伝え合いがうまくいくかどうかは、お互いの持っている語彙によって影響される。読んだり、聞いたりするものを理解するための語彙と、正確に内容を伝え、分かりやすくかつふさわしく言い換え、理解を深めるために質問するときなどに活用できる語彙とが必要である。

◇自分に必要な語彙に精通する

とはいえ、ただ多くの言葉を知っておけばいいというものではない。必要となる語彙は、人によってそれぞれ異なる。従事する仕事や研究、趣味、家事など、それぞれの分野で求められる語彙に精通し、それらを適切に使うことができるよう努めるべきである。専門によっては外来語などの片仮名語のような一般的でない用語を身に付ける必要もある。また、自分の持っている専門的な知識を、より分かりやすく説明するための語彙を持っておくことも望まれる。

◇社会生活に必要な語彙を身に付ける

一方、ふだんの社会生活を豊かにするための語彙がある。漢字の訓読みは、日本固有の言葉である和語に基づく。和語を身に付けることは、特に話し言葉において有効である。また、漢字の音の組合せによる熟語である漢語は、抽象的な概念を表すのに適している。これらを身に付けるには、それぞれの漢字がどのような言葉を構成し、語彙の広がり形成するのに注目した漢字の習得が求められる。加えて、身に付けた言葉を分類・整理し、ほかの言葉や語彙とどのような関係にあるのかを正しくつかむことも必要である。

(6) 媒体ごとの特性を意識して伝え合う

◇話し言葉、書き言葉それぞれの特徴を踏まえる

書き言葉は繰り返し読むことができるが、話し言葉は繰り返し聞くことが難しい。目で見える書き言葉では、漢字と仮名の組合せや読点や記号の使い方を工夫することによって、理解しやすくなる。この点で、書き言葉に用いられる記号の使い方などを改めて整理するとともに、より伝わりやすい表記の在り方などを検討する必要がある。他方、耳で聞く書き言葉では、同音異義語の多い漢語の多用を避け、聞いていて意味の取りやすい表現を選びたい。

◇目的に合った媒体を選び適切に用いる

話し言葉では、対面の会話や電話での通話など、書き言葉では、通知文書や手紙、メモなど、そして、程度に差はあるが双方の性質を備え持ついわゆる打ち言葉では、電子メールやブログ、SNS、チャットなどの媒体が用いられている。(電子メールやブログなどには、書き言葉の性質を持つものもある。)これらの媒体には、同期性、双方向

性、用いることのできる要素（表情、音声、文字、記号、画像、絵文字等）、匿名性、拡散性などにおいて、それぞれに特性がある。それぞれの媒体の特徴と特性を踏まえて手段を選択し、目的に応じて適切に用いる必要がある。

また、様々な媒体が活用される時代においても、大切なことを伝える場合には、対面で伝え合う機会を作るよう互いに努力すべきであろう。

◇ウェブでは伝え合いができない人に配慮する

また、インターネットを利用していないか、使用することに慣れていない人たちがいる。特に、高齢者の多くは、ウェブを介する手段を使っていない。重要なことを知らせる場合には、この点に十分留意する必要がある。

◇文字を手で書く習慣を大切にす

特に私的な文書や手紙など、書き言葉で伝え合う際には、手書きすること、あるいは、印刷文字で書かれたものに手書きによる一言を加えることが喜ばれる。印刷文字を中心とした伝え合いの中にあっても、手書きする習慣を将来にわたって残していきたい。

以上のとおり、現代の伝え合いに関する様々な課題を整理し、また、それらの課題に向き合っていくに当たって、これからの社会に必要な考え方を提案してきた。では、これらの提案に基づき、伝え合いの質を高めていくには、具体的にどのような方法があるだろうか。Ⅲ章では、伝え合いの中核となる言葉による伝え合い（言語コミュニケーション）を、より良いものにするための方法について考えていきたい。」

○沖森主査

ただ今の8ページから11ページの部分について、御意見を頂ければと思います。

○石黒委員

一つはタイトルというか、見出しに読点を入れるのはどうかということです。悪いかどうか分からないんですが、例えば9ページ(2)の「◇相手や周囲に合わせるのではなく、伝え合う方法を探る」「◇外部の人には、仲間内に向けてとは違った言葉で」と2か所に読点が入っています。本当は見出しに入れない方がいいかと思いつつも、(2)の四つあるうちの一番上の◇「認め歩み寄る」という連用形が二つ並ぶのも読みにくいので、読点があってもいいかと思ったり、次の10ページ、「(3)人の言葉には優しく、自分の言葉には厳しく」というリズムはすてきなもので、読点を打つのか、読点を打たないにしても空けた方がいいのか、どうしたらいいのかと悩んでいます。

次、9ページ「◇言葉の重みを再認識する」の4行目、「大切な人から相談を受けたときなど」とあります。確かにそうですが、大切な人から相談を受けたときと言ってしまふと、大切でない人から相談を受けたときはどうなるのかと思ってしまうので、「人から大切な相談を…」とか、「深刻な相談を…」の方がよいと思いました。

もう一つ配慮に関して言うならば、11ページ(6)三つ目の◇の2行目、「特に、高齢者の多くは、ウェブを介する手段を使っていない」と言うとき、高齢者の方ができることと怒るかもしれないので、「頻繁には」くらい一言入れてもいいかと思いつつも。

○森山副主査

今、石黒委員がおっしゃった部分ですが、どうしてもウェブとかインターネットのことが取り上げられているんですが、高齢者の方とかではなく、例えば耳が聞こえない方で筆談をするとか、いろいろな身体的条件などに合わせて、場合によっては手話通訳が会議で出てくるとか、そういったことに対する配慮も大事だということをも是非入れていただきたいと思いつつも。

○関根委員

10 ページ「◇敬語を身に付ける」のところで、「実際の社会生活の中で主に身に付けられているが、「敬語の指針」を活用するなど、具体的に学ぶ機会」の具体的にというの、どちらかというとも実際の社会生活の中が具体的で、「敬語の指針」を活用するのは体系的、理論的かと、そのようになるかと思った。

○田中委員

10 ページ（3）「◇他者の言葉や言葉の使い方に対しては寛容に」の最後「互いが言いたいことを、しっかり話せるような状況を作ること大切である」、これは必ずしも話し言葉に限っているわけではありません。前に似たような議論をしたような気がします。互いが伝えたいことを」として、後を「伝え合えるような状況」とすると、くどいから、どうしようかと思いますが、「話せるような」だけでも「伝え合えるような」とかにしておいた方が、「言いたいこと」は抽象的に「言いたいこと」でもいいような気がするの、変えた方がよいと思います。

それと、11 ページ（6）「◇話し言葉、書き言葉はそれぞれの特徴を踏まえる」の4行目のところ、「他方、耳で聞く書き言葉では」というところは、要するに書き言葉のような硬い言葉で、漢語とかをたくさん使っているものを口で話す、という意味でしょうか。それとも、ここは、「話し言葉」ではないのでしょうか。

○武田国語調査官

申し訳ありません。ここは「話し言葉」と書こうとしました。

○田中委員

何かすごく複雑なことを言おうとしているのかと思ってしまいました。

11 ページの一番下、「◇文字を手で書く習慣を大切にする」のところですが、それを大切にしようとする前の期で言ったからと伺っていましたが、「文字を手で書く習慣も大切である」とかでは駄目でしょうか。

○山元委員

6 ページからの課題があって、その課題を克服するために8 ページから、「向き合うために」とあると思います。こういう課題だから、この課題に関してはこういうようにと、柱を全部合わせる必要はないと思いますが、そのつながりを密接にした方がよいと思います。

具体的に言えば、7 ページの「（4）世代間の意識の違い」は、9 ページの「（2）他者との歩み寄りを大切にする」の相手というところに対応しているかと思いますが、7 ページの「（5）情報化の進展による伝え合いの変化」は、11 ページの（6）媒体というものを意識しながら伝え合いの変化に応じた言い方をする方がよい、に対応しているように読めました。そのように、文言をそろえたりすると対応しているように読めるかと思いました。

残ったのは、8 ページの（1）、やはり言葉が大事なんだというところが、その前に書いてあるかということとそうでもありません。課題との対応が薄い感じがしたので、これを最後に持っていったらどうでしょうか。相手のことを考えるのが他者との歩み寄りというところで、二つ目が媒体、伝え合いの質の変化というものが起こっていて、それを意識しろというのが（6）。でも、何より大事なのはやはり言葉だと思っていて、8 ページの（1）辺りを最後のところに持っていったらどうかなどと思いながら読みました。

○塩田委員

9 ページ「◇言葉の重みを再認識する」の「曖昧なまま理解したような積もり」になるという「積もり」の漢字の表記は、私は余り目にしないんですが、問題ないでしょうか。

○武田国語調査官

文部科学省用字用語例では漢字表記だったと思うのですが、確認してみます。

○田中委員

言葉を後でそろえるときに、気になったところがあったので。

9 ページの上から三つ目「◇言葉の重みを再認識する」の1行目、ここでは「情報端末やメディア」と言っています。

それから、10 ページの一番下「◇自分に必要な語彙に精通する」の下から2行目、先ほど石黒委員がおっしゃっていた「外来語・外国語」、ここでは「外来語などの片仮名語」と言っていて、ほかにも「新語」と言っているところがありました。

あと、11 ページのところで、もう一回しっかり冷静な気持ちで読み直さなければいけないと思うんですが、(6)の二つ目「◇目的に合った媒体を選び適切に用いる」のところにも、双方向性のやり取りといった話にブログが出てきています。先ほど、8 ページのところでブログは要らないのではないかといった御指摘があったので、双方向性に重点化するのだったら、ブログを外すと丸括弧の中の書き方も変わってくると思います。そこは全体で、要するに双方向性のあるものについて打ち言葉的に捉えるなどに統一していくと、選択されるものが変わるかと思いました。

○森山副主査

11 ページの「◇社会生活に必要な語彙を身に付ける」の3行目「熟語である漢語」と出てくるんですが、「漢字の音の組合せによる語である漢語」とか、「による言葉」ならいいんですが、熟語である必要はないので、これは取った方がよいと思います。

もう一つ、多分、ほかにもいろいろお考えがあると思うんですが、10 ページの(4)の二つ目「◇敬語は大切だが全てではない」の「相手との距離を保ったり遠ざけたりするための言葉でもあり」というところはいいと思うんですが、この相手というのは聞き手のことを主に述べていらっしゃると思うんですが、敬語の中の、いわゆる素材敬語と言われる尊敬語とか謙譲語というのは、極端な場合、独り言でも言えるわけです。その相手という言葉が若干、気になります。もし、ほかの方がよければ別にいいんですが、敬語と言いながら、二重敬語というのは出てくるんですが、丁寧語的用法のことだけを取り上げているかのような気もしまして、少し気になりました。

○田中委員

森山副主査がおっしゃった部分で、私は「心地良い距離を作る上での自己表現」というのが気になっています。確かに自己表現だけけれども、ここの中で「自己表現とは何か、自分らしさということか」みたいな話がありました。それで、自分らしさはやめようみたいな話をしている、そういう個性とか、キャラみたいな話と、敬語を使ってその場とか、関係性を調整しようということは違うような気がしています。気になる人が私だけだったら忘れていただいてもいいんですが、「自己表現」がよく分からないと思いました。

○沖森主査

それでは、次に移らせていただきたいと思います。続きまして、「Ⅲ 言葉による伝え合いのために」の「1 言葉による伝え合いの四つの要素」について御検討いただきたいと思います。事務局に読んでいただき、その後で意見交換をお願いしたいと思います。

○武田国語調査官

以下、読んでいきます。

「Ⅲ 言葉による伝え合いのために

1 言葉による伝え合いの四つの要素

伝え合いとは、複数の人が互いの異なりを踏まえた上で、情報や互いの考え、気持ちなどをやり取りし、理解し合い、その理解を深めることである。

伝え合いは、言葉の周辺にあるもの、また、いわゆる言葉以外のものによっても行われ、影響を受けるが、その中核を担うのは、言葉による伝え合い、つまり「言語コミュニケーション」である。特に、価値観が多様化し、共通の基盤が見付けにくくなると考えられるこれからの時代においては、互いの異なりを乗り越えて歩み寄ることがこれまで以上に必要である。そのためには、言葉によって考え方や気持ちを表し、擦り合わせていくことが欠かせない。また、多様な他者との間で起こりやすい誤解を避けるための言葉の使い方を身に付けておく必要もある。さらに、もし誤解が生じてしまった場合には、それを解くのも言葉によるほかない。

では、言葉による伝え合いの質を高めるには、どのようなことに留意すべきであろうか。伝え合いが円滑に進んでいるときには、次に挙げる四つの要素が、目的に応じてバランス良く言葉のやり取りを支え、言葉の使い方に反映されていると考える。まず「正確さ」がある。これは、互いにとって必要な情報を誤りなくかつ過不足なく伝え合うことである。次に「分かりやすさ」がある。これは、互いが十分に情報を理解できるように、表現を工夫して伝え合うことである。さらに「ふさわしさ」がある。これは、場面や状況、相手の気持ちに配慮した話題や言葉を選びながら伝え合うことである。そして最後に「敬意と親しさ」がある。これは、伝え合う者同士が近づきすぎず、遠ざかりすぎず、互いに心地良い距離感に立って伝え合うことである。

この四つの要素を意識し、目的に応じてそれぞれの軽重とバランスを調整しながら、情報や互いの考え、気持ちなどをやり取りすることが、望ましい言葉による伝え合いを実現していく上でのヒントとなる。以下、四つの要素について順に見ていく。

(1) 正確さ

◎概観 「伝え合う内容への配慮」

「正確さ」とは、伝え合いの期目的が達成されるよう、互いにやり取りする情報、考え、気持ちなどを誤解なく、意図するとおりに伝え合うことである。

◎主な観点

〔正確な語彙〕

- 言葉のルールにのっとっているか
- 正確に伝えるための語彙が使われているか
- 誤解を生じさせる言葉はないか

〔正確な内容〕

- 情報に誤りがないか
- 情報は目的に対して必要かつ十分か
- 信頼できる裏付けに基づいているか

〔正確な表現〕

〈話し言葉〉

誤解されないような言い方をしているか

〈書き言葉〉

正しい表記が用いられているか

句読点や記号を適切に用いているか

(2) 分かりやすさ

◎概観 「互いの理解への配慮」

「分かりやすさ」とは、互いにやり取りする情報、考え、気持ちなどを、相手と歩み寄りながら、言い換えたり、表現を工夫したりして、理解し合えるように伝え合うことである。

◎主な観点

[分かりやすい語彙]

互いに分かる言葉を使っているか

必要な言い換えがなされているか

独りよがりの表現になっていないか

難しい専門用語や外来語が使われていないか

[分かりやすい内容]

互いの知識や理解力を洞察しているか

情報の量は多すぎないか

情報が整理されているか

[分かりやすい表現]

〈話し言葉〉

相手が聞き取りやすいように話せているか

理解できないときに質問などによって説明を求めているか

話の構成が考えられているか

〈書き言葉〉

読みやすいように文字が書けているか

文章の構成が考えられているか

(3) ふさわしさ

◎概観 「場面や状況、互いの気持ちへの配慮」

「ふさわしさ」とは、やり取りする内容に関して、相手や状況に配慮し、互いにとってふさわしく感じの良い話題や言葉を選んで伝え合いを成功させることである。

◎主な観点

[ふさわしい語彙]

相手にとって受け入れやすい言葉を選んで使っているか

場面や状況に合った言葉を選んで使っているか

[ふさわしい内容]

相手にとって受け入れやすい話題であるか

相手にとって有益か

[ふさわしい表現]

違和感・不快感を抱かせるおそれはないか

自分らしさが表れているか

〈話し言葉〉

(会議や冠婚葬祭など) 場面に合った言葉遣いをしているか

〈書き言葉〉

目的に合った媒体を適切に用いているか
文章の目的に応じた書き方のルールにのっとっているか

(4) 敬意と親しさ

◎概観 「互いの関係性への配慮」

「敬意と親しさ」とは、伝え合いに参加する者同士が相手との関係性を踏まえて示す、敬意と親しさのバランスに関わることである。

◎主な観点

〔敬意表現〕

相手に対する配慮の表現が適切か
互いの言葉に対して寛容であるか

〔私／公〕

敬意と親しさのバランスがとれているか

〔目上／目下〕

過剰な敬意によって相手を遠ざけていないか
親しさをうまく表せているか

〔状況・場面〕

互いに遠ざかりすぎたり、近づきすぎたりしていないか
必要な場面で敬語が適切に用いられているか

これら四つの要素は、互いを支え合うだけではなく、対立する側面も持っている。例えば専門家同士であれば専門的な用語を用いる方が内容を正確に伝え合うことに寄与する。しかし、正確さを重視して、それをそのまま一般の人に向けて示した場合には、分かりにくい情報になってしまうおそれがある。また、意味を取り違えるおそれの少ない直接的な表現をした方が、正確さや分かりやすさを確保できるとしても、それらを犠牲にして少し遠回しな言い方をした方が、相手の気持ちに沿うという点でふさわしい場合もある。私たちは、ふだんから、伝え合いの目的、相手、場面や状況によって、どの要素を優先し、あるいは控えるのか、バランスをうまくとりながら伝え合いを行おうとしている。そのことをよりはっきりと意識しておくことが、望ましい伝え合いのためのきっかけとなる。

次節、「2 様々な伝え合い（言葉による伝え合いに関するQ&A）」では、これら四つの要素とその観点について、考え方を分かりやすく示すとともに、実際に問題となる場面を取り上げたケーススタディによって、理解を深める機会としたい。」

○沖森主査

では、ただ今読み上げていただいた 12 ページから 15 ページの部分で、御意見を頂きたいと思います。

○秋山委員

先ほどのところから、私の中でよく分からないので教えていただきたいんです。語彙の質と量というところなんですけれども、量はとても分かるんです。でも、今、ずっと読んでいただいた「正確さ」、「分かりやすさ」、「ふさわしさ」のところ、「正確な語彙」、「分かりやすい語彙」、「ふさわしい語彙」というそれぞれの項目があり、それぞれに三つ、あるいは四つ項目が上がっているんですが、どの部分が語彙の質に当たるのか、これがよく分からないので教えていただきたいんです。ここには該当するものがないということでしょうか。要するに、質がどういうことなのかがよく分か

らないのです。

○入部委員

11 ページからのつながりで、これはタイトルにも関係してくると思うんですが、11 ページの最後のところで「伝え合いの中核となる言葉による伝え合い（言語コミュニケーション）」、それを繰り返して12 ページでもう一回、仕切り直して言っている形です。

タイトルとも関係しているので、今回、こういう形にはならないかと思うんですが、「コミュニケーション」という言葉は現段階の素案の中に57回出てきます。「伝え合い」は159回出てきます。「伝え合い」だけではなくて「伝え合う」という形まで含めると相当数出てくるので、間違いなくキーワードだと思います。

一般市民の方が読者として読んでいて、11 ページが終わった段階で、ローマ数字のタイトルが「言語コミュニケーション」になるのか、「言葉による伝え合い」でそのまま行ってしまうのかというのは、非常に大きな問題だと思います。それがまた報告書のタイトルとも関係してくると思うので、11 ページと12 ページで2回言っているということもあって、丸括弧と鍵括弧と両方出てきます。この辺を、12 ページの最初のタイトルの段階できちんとどちらかに決める必要があるかと思います。

「言語コミュニケーション」ということであれば、ここの辺りから仕切り直していかないと、159回というのは相当な数ですので、これをもって「言語コミュニケーション」であるという口頭での説明だと違うという印象を持たれるかと思います。「言語コミュニケーション」と、仮のタイトルも付いていますが、このまま行くのであれば、Ⅲはそのようにした方が分かりやすいのではないかと思います。

○石黒委員

今のことに関連し、全体のタイトルにも関連するんですが、2 ページの四角囲みの中で、「言葉による伝え合い（言語コミュニケーション）」となっていて、元々のタイトルが「伝え合いのための言語コミュニケーション」となっています。そうすると、言語コミュニケーションが言葉による伝え合いであるとするならば、「言語コミュニケーションのための言語コミュニケーション」にタイトルがなっているような気がします。途中に「望ましい」、「より良い」という言葉が使われていて、それがすごく重要になるかと思うんです。

そうした場合、12 ページのⅢは、例えば「言葉による望ましい」とか「より良い伝え合いのために」となって、その下は言葉による伝え合いの四つの要素でいいかと…。タイトル全体もやはり「望ましい」とか、入部委員の御議論に加えて、そういう2種類の概念があると感じたということです。

○田中委員

(1) 以降の書き進め方というか、よく分からなく分類されているものについてです。二重丸があって、四角括弧があって、その下にあるときは三角括弧になっているんですが、四角括弧で取り出して言う必要があるのかと思います。なぜかというところ、いろいろなところで四角括弧の下に入っていることに、ここなのだろうか、しかも、このグループなのだろうかと思うところが結構あるということが一つ。

例えば、(1) 正確さのところ、◎主な観点〔正確な語彙〕となっていて、語彙のはずなのに「言葉のルールにのっとっているか」とあり、これは文法とかのことを言っているんですね。そうすると、語彙ではないだろうと。つまり、ここのは、四角括弧で見出しを付けて見やすさを優先されたんだと思うんですけども、この見出しを立てることによって、ちょっと箱には入れにくいようなものを無理に箱に押し込

んでいる感じです。こうしたことが随所に見られると思います。だから、箱がなくても、まだこれからの議論になると思うし、多分、いろいろ直すことになると思うんですが、例えば15ページのイメージ図のところは、一応、並列的に、何となく元々の表を分解したような形に入っているのだから、何か誤解、謎の箱入れみたいなことを起こさないために四角括弧は外すとか、何か考えてもいいかと思いました。

やはり私が一番気になったのは、〔〇〇の表現〕という箱のところですね。ここまでは話し言葉、書き言葉、両方の性質を持つ打ち言葉について議論してきたのに、消えるんです。別にこれはこれで、話す際にはこうとか、書くときにはこうとか、ネット上における双方向コミュニケーションについてはこうといったような形で処理していけばいいことだと思います。三角括弧も、1個足りない、急になくなっているし、やめてもいいのではないかという気がすごくしました。

それから、まだ図のところに行っていないのですが、これまでの議論を踏まえてみると、特に「ふさわしさ」は媒体選択について議論していたはずで、このことについてはⅠでもⅡでも言っているわけです。でも、それがⅢになると急に消えている。だから、このところは、確かに言語そのものではないけれども、伝え合うためにはどの媒体を選択するのかといったことはすごく大事であると繰り返し言ってきているので、図の中には入っています。ただ、前回、主査打合せ会で検討したからだと思うんですが、そこが消えているので、括弧で箱を作ってしまったことによって微妙なところが出てきているのを、括弧を外した方が処理しやすいかと。見出しが付いている感じがすごくいいんだけど、微妙です。

先ほどの媒体のところについては、中はともかくとして、1でべたっと書いてある第3パラグラフの下から3行目「そして最後に『敬意と親しさ』」に行く前に、媒体選択のふさわしさといったことが入るんだろうと思います。以下、述べていくときに、その辺のことを意識して入れていただければいいかと思います。つまり、Ⅰ、Ⅱとのバランスとか、何か急に消えているものとかがあるから、そのところを、箱を作らない方がやりやすいかと思います。そうすれば、うまく入らない感じのものの処理がしやすいのではないかと思います。

○山元委員

質問ですが、ここは今後、文章化するためのメモなのでしょうか。「◎概観」と急に出てきているので、そのような印象を受けつつ読ませていただきました。もしかしたらスタイル的に、今、箱の話もありましたけれども、もっと良い物が入れたらいいと思いました。

○関根委員

表現ですが、「正確さ」とは…意図するとおりに伝え合うことである、「正確さ」とは…とすることであるとなっていますが、「正確さ」とは、例えば「意図するとおりに伝え合うために必要な要素である」、あるいは「留意すべきことである」、「…ために欠かせない」とか、そういう表現になる方が自然でしょう。

それから、「伝え合い」を最終的に改めて、「コミュニケーション」と「言語コミュニケーション」に変えるかどうかという議論がこれからまだ残っていると思いますが、その前に「伝え合い」がたくさん、百九十何箇所とおっしゃっていましたが、私も見ていてちょっと多過ぎるかなと感じました。仮にこれを「言語コミュニケーション」に直すにしても、やはりくどい感じがします。だから、どうするかの前に、もうちょっと表現を工夫するのはどうか思います。

例えば「文字のやり取りの伝え合いで行えるような」というところは「文字のやり取りによって行えるようになった」という感じで、「伝え合い」という言葉を省くことが

できます。

それから、「伝え合い」ということで一番大切なのは、3ページの「情報や考え、気持ちをやり取りし、互いについて共通理解を深めていくという働き」です。それを伝えているわけだから、例えば「共通理解を深めていく」、あるいは「情報や考えや気持ちをやり取りする」というように、文脈によって置き換えることができるのではないかと思うんです。そうすると、最終的に「伝え合い」を残すにしても、「言語コミュニケーション」に直すにしても、もう少し分かりやすくなるし、くどくならないのではないかと思います。

○川瀬委員

15ページの図のビジュアルの作り方で、これはもうビジュアルなので好き嫌いの問題なのかもしれませんが、言葉による伝え合いにおける四つの要素が大きなタイトルというか、枠組み全部を包括するタイトルになっているんですが、「望ましい伝え合いにおける四つの要素」にすれば、真ん中の「望ましい伝え合い」が微妙に四つを食っている集合みたいな丸は作らなくていいと思います。こういう図を見たときに、何となくやはり集合をイメージする、多分、これも、これも、これも、これも必要なんだよということを示したいんだろうとは思いますが、ビジュアルとしてどうなのだろうと少し引っ掛かっています。

本来は全部が必要なのだろうけれども、ケース・バイ・ケースで、これとこれだけあればよいときもあるという話がこの下に続くので、もしかしたら全部に少しずつ掛かっている真ん中の丸はない方が図としては分かりやすいかと思いました。

○入部委員

13ページ、真ん中よりちょっと下の〈話し言葉〉、〈書き言葉〉ですが、前半に打ち言葉という形で出てきて、とても大事なキーワードだと思うので、例えば音声言語、文字言語のように分けて、専門的には田中委員におっしゃっていただかないと分からない感じですが、打ち言葉がちゃんと入るような感じにしたらどのようになるのでしょうか。ちゃんとした代案はないんですが。全部通して読む方がいるかどうか分かりませんが、前半のキーワードとして何回か出てくるので、それがどのような形で位置付くのかというのは、この段階で〈話し言葉〉、〈書き言葉〉で分けてしまうと、整合性としていかなものかという感じがします。

○秋山委員

今、「打ち言葉」の話が出ていたので、私も前に打ち言葉というのは一般的ですかとこの会の中でお聞きしたことがあります。周りの人たちに聞いてみると、やはり知らない人が多い。そういう中にいる私がこれを読んでいて、4ページのところで「キーを打って伝える、こうしたいわば「打ち言葉」と定義付けがはっきりされているので、なるほどと思いました。

ただ、8ページの(6)対面での伝え合いに対する意識の三つ目の◇、ここの「打ち言葉」には鍵括弧が付き、11ページの(6)媒体ごとの特性を意識して伝え合うの二つ目の◇の2行目のところでは「程度に差はあるが、双方の性質を備えもについていわゆる打ち言葉」となっていて、いろいろな扱い方がされています。これは何か統一した方がいいのか、あるいは打ち言葉に対して、話し言葉、書き言葉、打ち言葉と三つきちんと並べられないのか、並べられるのか、そこら辺が不明です。

○入部委員

それに関連して。打ち言葉については、19ページのQ & Aに非常に詳しく出てくる

ので、これにうまくつなげていくようなものがあるといいかと思ひます。それは、Ⅲのところにもあるといいと思ひます。

○秋山委員

そうすると、そこでは打ち言葉に鍵括弧が付いているから、全部、鍵括弧を付けていくものなのかどうかというところもあると思ひます。

○沖森主査

では、Ⅲの2の方に移らせていただきます。様々な伝え合い（言葉による伝え合いに関するQ&A）の部分ですが、この部分については早くにお送りしてありますので、既にお読みいただいているかと思ひます。これまでの部分と違って少し長くなりますので、今の時点で何かお気づきになった点等ございましたら、御質問も含めてお願いしたいと思ひます。何かお気づきの点、あるいは質問等ございましたら、御自由にお願ひいたします。

○滝浦委員

Q&Aではなく、戻ってしまうんですが、何となく引っ掛かっていたことです。Ⅱの1から2に掛けてです。構造は大変よく分かって、1で課題を示すということをして、2でそれと向き合うためにどうしたらよいかという提案をするということですが、先ほど朗読して下さったのを聞いていると、文末の表現が印象に強く残りました。

課題の方では、課題は現状認識なので、「増えている」、「なっている」、「…しやすい」という言い方がすんなり入ってきます。その次の提案の部分の表現が、すごく工夫されているのはよく分かるんですが、多分、難しいだろうと思ひますが、回数が増えてくると、例えば「大切である」、「模索すべきである」、「心掛けたい」、「捉えたい」、「築きたい」、「意識したい」、「努めるべきである」、「選びたい」、「努力すべきであろう」など、時々、説教されているみたいに感じないかと思ひました。だからといって、どういう表現に変えたらいいかというのは大変難しいですが、提案というのはどういう言葉で表現されるべきなのかとちょっと考え込んでしまいました。

中立的な言い方は「必要である」ということですが、必要であるにしても、必要であると断言していますので、必要なんですねと読むしかないわけです。もしかすると投げ掛けるような、「必要ではないだろうか」、「考えていきたい」と少し読む人の主体性に委ねるなどしてもよいのかと。最後の調整レベルだと思うんですが、何となく受け取る印象が左右されそうな気がしました。

○関根委員

これは提案というか、お願ひです。Q&Aを幾つか担当した者として、本文を作るのとほぼ同時進行で進めてきましたが、本文の方がかなり動きました。内容レベルから、いろいろな組み立て方も変わってきているので、事務局で調整していただきたい。ダブっているところもあるので、その辺りは、いわゆる換骨奪胎、本来の意味の換骨奪胎でしていただければいいのではないかと思ひます。

それに対しての提案というか、こういう材料もあるというのはほかの委員の方からも寄せていただいて、それは材料という形で事務局で取りまとめて、本文に合った形、対応する形で整理していただければいいのではないかと思ひます。それで、改めてこちらに投げてもらえれば、いいものができるのではないかと希望します。

○滝浦委員

小さいところで、先ほど「非同期」の話が出ていましたが、用語としては「非同期」

でもう決まっているみたいですが、一応、単語の意味としては、英語の単語の訳は「非同時的」と出ていたりもするので、どこかで非同時的コミュニケーションみたいに補うか、意味で取りましたということで「非同期」をやめて、全部、「非同時的に」してしまうかということもあり得ましょう。「非同時的」というのは割と分かるかと思いました。

○入部委員

Ⅲのところ、先ほど文章量について山元委員からお話がありました。多分、肉付けされて、それぞれにパラグラフができると思うんですが、その後にQ&AがくっついてⅢを成すということになっているかと思います。

それで、Q&Aという形でいいのかどうかということで、以前、報告書でQ&Aという形を取っていたということがベースにあると思うんですが、Q&Aという形ではなく、学びの一つ目、二つ目といったような、Q&AがⅢの本体にくっついて全体というのはイメージとしてどうかと思ました。Q&Aと言うと、巻末に、正にQ&Aの形で付くということがあるので、内容も26しかないということですし、これからの時間的な制約を考えますと、できて30から35ぐらいだと思います。Q&Aというよりは、きちんとこれを一つずつ、一通りお読みいただけるような、つまみ食いをするような感じのQ&Aとはちょっと違うもので、言い方を変えともうちょっとちゃんと読んでもらえるように思います。30ぐらいであれば一通り読んでいただきたいので、もう少し考える時間の猶予はあると思いますので、御検討いただきたいと思います。

○福田委員

前に戻ってしまうんですが、15ページの図の下の段落です。下から4行目「相手の気持ちに沿うという点でふさわしい場合もある」という形ですが、四つの要素が望ましい伝え合いを支えているという話なので、ふさわしい場合という四つの要素のカテゴリー一面を使うと混乱してしまうと思ひまして、ここは「望ましい場合」ということかと思いました。

○田中委員

最後にウェブ調査の結果を付けてくださっているんですけども、このウェブ調査の結果は文化庁のウェブサイトなどで公開しないんですか。予定はないんですか。

○武田国語調査官

検討中ですが、大々的にやったものではないので、扱いについてはちょっと検討させていただきますと思っています。

○田中委員

でも、サンプル数は結構ありますよね。

○武田国語調査官

そうですね。そういう意味では大々的かもしれませんが、予算をかき集めてやったものという意味で。

○田中委員

分かりました。

○森山副主査

12 ページ「(1) 正確さ」の部分の2行上ですが、「望ましい言葉による伝え合いを」の部分。修飾関係だけで言うと「望ましい言葉 による 伝え合い」になってしまうので、「言葉による望ましい伝え合い」と直さざるを得なくなるかと思います。そういうことも含めて考えますと、当初の2ページの箱の中、結局、「…伝え合い、特に言葉による伝え合い(言語コミュニケーション)…」となっていますので、今回の報告はこれでいいと思うんですが、将来的に「言語コミュニケーション」で一本化した方がはるかに分かりやすく、また伝え合いという言葉もそういう形の方が、本来の意味で使えるのではないかという思いを持って伺っておりました。意見として申し上げました。

○田中委員

今の部分は「言葉による望ましい伝え合い」にしたら迷わないですか。

○森山副主査

そういうことも出てきますので、一応そうしたらと申し上げた次第です。

○沖森主査

タイトルにつきましては、また今後、御相談、御意見いただきたいと思います。では、配布資料2についての検討はここまでとさせていただきます。本日頂いた意見を踏まえ、来週の国語分科会に審議経過報告案を示したいと思っております。ただ今頂いた意見を反映した修正については、主査である私に一任していただきたいと思いません。よろしいでしょうか。(→ 了承)

どうもありがとうございました。

コミュニケーション、言葉遣いという非常に難しい課題について御検討いただきありがとうございました。そろそろゴールが見えてきたか、見えてこないのかよく分からないのですが、見えてきたと私は信じております。ただ、先ほどありましたように、課題としてありますタイトルをはじめとして、幾つか問題がまだ残っております。残り少ない時間の中で、より良いものを作っていきたいと思っておりますので、引き続きよろしく御協力のほどお願いいたします。

それでは、本日の国語課題小委員会はこれで閉会といたします。御出席、どうもありがとうございました。